

沖縄の戦後関係資料と沖縄系移民資料に関する調査報告

新城さやか、萩尾 俊章

(沖縄県立博物館)

Research Report on Materials Concerning Postwar Okinawa and Emigration from Okinawa.

Sayaka SHINJYO and Toshiaki HAGIO

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

1995年度（平成7）は戦後50年の節目にあたる年で、沖縄県立博物館では太平洋戦争・沖縄戦終結50周年事業の一環として特別展「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」が企画されている。その特別展の実施計画にともない、沖縄の戦後資料の調査をおこなった。本稿はそれらの資料調査で得られたデータについて、特別展の中では十分に生かすことのできないデータに関して資料報告をするものである。

資料調査は沖縄県内分に関しては、萩尾俊章と新城さやかが1994年10月から1995年2月にかけておこなったものによっている。資料の一覧は桐のデータファイルに一括して入力・保管されている。ここで紹介されているのはその一部である。また、アメリカの沖縄関連の資料調査については、沖縄県立博物館職員の浜比嘉勝副館長、大城将保学芸課長、久貝勝盛学芸員と萩尾が1994年6月12日から26日、與那嶺一子学芸員と萩尾が同年11月25日から12月6日の計2回にわたっておこなったものにもとづいている。これについても同様にデータファイルに保管されている。

本稿は、前半の沖縄の戦後資料については新城さやかが、後半の移民関係資料については萩尾俊章がそれぞれ分担して執筆した。

1 占領下初期の統治機構に関する資料

1) 沖縄諮詢会関係資料

去る太平洋戦争において日本で唯一地上戦の場となった沖縄では、1944～45年にかけて住民をも巻き込んだ激しい壮絶な戦闘が繰り広げられ、20万余の尊い人命が失われる結果となった。その戦闘の様子についてはここでの論述趣旨から外れるため割愛するが、1945年4月、沖縄本島に上陸を開始した米軍は、南西諸島を米軍の支配下に置くことを内容とした「ニミッツ布告（米軍海軍軍政府布告第1号）」を発表、沖縄本島中部の読谷村に米海軍政府を設置するとともに本島内および周辺離島10数カ所に一般住民や軍人軍属のための捕虜収容所を設け、占領政策の足掛かりを築いていった。そして同年8月15日、米軍政府は各地の収容所から124名の住民代表を選んで石川市に招集し、仮沖縄人諮詢会を開いて沖縄の中央政府創設に際する準備機関としての諮詢会設置および沖縄占領行政の基本方針を初めて明らかにするとともに、続く20日にはこれら住民代表による諮詢委員選挙のもと15名の委員を選出させた。これが戦後沖縄の行政機関の始まりともいえる「沖縄諮詢会」の誕生である。

志喜屋孝信を委員長として発足したこの沖縄諮詢会は、当初その活動の場を石川市石川に置き、米軍と住民との橋渡し的役を果たす機関となつたが、そもそもが米軍政府の諮問機関であることから決議権等の実質的権限を持った機関ではなかった。しかし、ここでえて特記すべき点はこの沖縄諮詢会によってさまざまな戦後復興対策が立案、実施されていき、沖縄の戦後行政の基礎を形作っていったということである。

ではこの沖縄諮詢会についての資料を見ていくと、まず最初に挙げられるのは「諮詢会會議録」である。これは当時の諮詢会委員たちと米軍政府との戦後復興における意見のやりとりを伺い知ることのできる貴重な資料であり、原本は現在沖縄県立図書館史料編集室（以下史料室と記述）の書庫に保管され、その内容詳細については文献「沖縄県史料 戦後1 沖縄諮詢会會議録」にまとめられているのでそれを参照されたい。また、同じく史料室書庫には他にも米軍政府が諮詢会を通して沖縄住民に出した指令および布告等の文書関係資料が英文と訳文の2種類で保管されている。ただ、會議録や文書とはいってもこれらは終戦直後の物資貧窮の最中に記録されたものであることから、使用された用紙が米軍政府配給の用紙や何らかの文字を記してある用紙の裏面を利用したもの、また上江洲敏夫氏が「終戦後しばらくして出回った緑の野線入りの用紙から、ザラ紙風の白紙やガリ版刷りの野紙などが使用され、法量も一様でない。表紙はマニラ紙よりやや薄手の厚紙や封筒用紙などが使用され^(注1)」と指摘しているように紙の種類およびサイズもまちまちで、さら

に記述に使用された筆記用具の種類も一定しておらず、この点において終戦直後の沖縄の時代相を物語る資料としての特徴を見ることができると言えよう。この他石川市立歴史民俗資料館には沖縄諮詢会看板が復元資料として収蔵されている。

沖縄諮詢会において戦後復興の手立てが確立されていったことは先にも述べたが、その中でもことのほか文化・教育面における復興については注目すべきものがある。文化面においては後でふれることとして、教育面では1945年5月石川市に戦後初めての学校「石川学園」が誕生したのを皮切りに、各収容所地区に次々と学校が開校されていった。これを受け同年8月には米軍政府内に教科書編纂所が設けられ、そこで作成された手作りの教科書が戦後沖縄の学校教育の担い手となった。これが有名な「ガリ版刷り教科書」である。残念ながら今回の資料調査において原本資料を見つけることはできなかったが、個人的に何名か資料所有者がおられるということで今後ぜひその方面に調査にあたりたいと考えている。また、先の石川学園については、現在石川市立城前小学校に記念碑「戦後教育発祥の地」が建立されており当時の様子をその碑文に見ることができる。

2) 民政府関係資料

1945年10月以降、収容所生活を送っていた住民たちの旧居住地区への帰村が許可されることになり、旧市町村の復活および各市町村長の任命によって県内の地方政治機構が次第に確立されいくようになると、それに伴う中央政治機構の改革の必要性が生じたため、前述の沖縄諮詢会は翌年の1946年4月24日、「沖縄民政^(註2)」へと発展的解消および発足を見る運びとなった。

では民政府関係の資料を見ていくことにする。まず会議録および文書資料であるがこれは前述の沖縄諮詢会会議録同様、史料室に保管されており資料の状態もほぼ同じである。史料室には他にも沖縄民政府総務部調査係が発行した「一九四六年 沖縄民政要覧」や沖縄民政府文教部発行の「一九四六年十一月 学校一覧表」等、中央政治機構発刊によるおそらく戦後初めてであろう統計資料がいくつか保管されていた。また、沖縄民政府の印章、看板は当県立博物館において現在常設展示されている。その他注目すべき資料としては、石川市立歴史民俗資料館で現在常設展示中の竹劇団一連資料が挙げられる。先の沖縄諮詢会当時、特に文化面復興が注目される事象であることは前述で若干ふれたが「軍政府の主要ポストには比較的リベラルな学者軍人がそろっていた。—中略—海軍軍政府のスタッフ連は沖縄の文化や歴史に理解があり—」^(註3)と大城将保氏が指摘しているように、当時米軍政府は文化面復興に際しての協力を惜しみなく行っていた。特に米軍政府文教部長のハンナ少佐に至っては戦前からの芸能関係生存者を調査し彼らを石川に集め、芸能活動を再

開させるべく多くの手助けを行った人物であるが、この芸能関係者たちを中心に「沖縄芸能連盟」が発足、後に1946年4月から1年間沖縄民政府文化部の直轄となった沖縄民政府劇団「松」「竹」「梅」の3劇団^(注4)の結成へと経緯をたどった。竹劇団というのはこのうちの1つで主に本島北部を拠点とした演芸活動を行った劇団であり、当時使用された舞台衣装や小道具および劇団長辞令書等が前述の竹劇団一連資料としてその活動を現在に物語る重要な資料となっているのだが、特に注目すべき点は、終戦後の物資不足の中にあって、劇団員たちが米軍政府の援助のもと米軍部隊からの物資などを入手、それらを有效地に利用して衣装、化粧品、小道具の材料としたことである。^(注5)米軍のカッパを利用した男物着物や払い下げ品利用の衣装箱などにはその見事な創意工夫の跡を見ることができる。

さらに民政府について考察の際、見逃してはならないのは宮古・八重山の両先島についてである。宮古・八重山は終戦直後は沖縄の政治機関からほとんど放置された状態におかれ、しかも1946年3月以降は沖縄民政府と行政組織上分離してしまったことから、1947年にそれぞれ「宮古民政府」「八重山民政府」を設置し独自の自治機構を確立していくねばならなくなってしまった。では、これら両先島民政府関係資料を見てみたい。まず、八重山民政府関係資料では1946年から1950年までの吉野高善知事時代の八重山民政府知事日誌が石垣市の南嶋民俗資料館に展示されている。また、この資料館には吉野高善知事による自筆の告辭あいさつ文や八重山民政府関連の新聞記事切抜が綴り資料として、その他、民政府認可の同人雑誌もいくつか収蔵されている。さらに前述の史料室には八重山民政府がかつて終戦直後八重山支庁だったころの八重山支庁布告文書がこれも綴られて保管されていた。これに対し、宮古民政府関係資料は十分な資料たる資料がなく、今回の調査で実際に見ることができたのは宮古民政府総務部調査課が発行した「公報 新宮古」(沖縄県立図書館宮古分館蔵) ぐらいであった。

3) 群島政府関係資料

前述の沖縄諮詢会、民政府に続く占領下初期の統治機構として次に登場したのが群島政府である。1950年11月～1952年4月の約1年半にわたり南西諸島は米軍政府によって沖縄・宮古・八重山・奄美の4群島に分割されたが、それぞれ各群島別にこの群島政府がおかれて、琉球列島米国民政府^(注6)（以下、米国民政府と記述）発令の布告・布令・指令などに基づいてその区域内の公共事務を処理し、行政事務を行う統治機構としての役割を果たしていた。

群島政府関係の資料を見ていくと、まず史料室の書庫に保管されている宮古群島条例文書綴りがあり、資料から伺える特徴としては、起案文が手書きされていること、また条例

項目に至っては貝殻・海人草および宮古上布検査条例などといったように地域色が色濃く反映された条例項目があるのが見受けられ、これは当時それぞれの群島別で条例が制定されていたことを裏付ける注目すべき資料ではないかと思われる。また、石垣市立八重山博物館では八重山群島政府印入りの委嘱状などがいくつか収蔵されており、さらに当県立博物館においては沖縄群島政府印を所蔵している。

以上、沖縄の戦後米軍占領下初期の統治機構関連資料について見てきたが、いずれの項目にても言えることは、これら資料の絶対数が少ないということである。終戦期の混乱および半世紀近くの年数を経ている影響などで資料が散逸した点もある。またわれわれの調査不足も否めない点ではあるが、今回の資料調査では沖縄本島・八重山に比べ特に宮古関係資料については残存資料が少ないという事実が顕著に現れる結果となった。

2. 戦後生活資料について

1945年の沖縄が戦禍による多大な被害を被ったことは周知の事実であるが、その中にあって住民たちは実にたくましく戦後の混沌とした時代を生き抜いていった。そのことを物語る資料としてやはり最も重要なのは、住民の生きていく姿のすべてが結集して生み出されたと言っても過言ではない、生活の中で最も欠かすことのできない生活資料の数々である。

この戦後における生活資料を見るにあたり、筆者は2つの項目に分けたいと考えた。1つは住民たちが終戦直後の収容所生活からやがてそれぞれの旧居住地へと帰村し、その後の生活基盤を確立していくまでの占領下初期（終戦直後）生活資料、もう1つは人々の生活も大方落ちつきを取り戻しつつあった1952年4月1日の琉球政府発足以降におけるアメリカ文化移入期の生活資料である。よって、以下の記述もこの2つの項目に従うものとしたい。

1) 占領下初期（終戦直後）の生活資料

①衣食住および冠婚葬祭関係資料

前章でも述べたように、戦後沖縄の出発点はそれぞれの地域的差異があるにせよ米軍の設けた捕虜収容所における生活復興からであると言えよう。終戦直後、人々は収容所生活において米軍からの無償配給物資によって日々の糧を得たが、やがて自分たちの生活の中にうまく適応させるべくこれらの配給物資に巧みに手を加え、創意工夫に満ち溢れた生活資料を次々と作り出していった。このような配給物資利用の生活資料については鍋やアイ

ロンなどに代表される飛行機部品のジュラルミンを加工した製品、薬莢を利用した灰皿、あるいは米軍払い下げの軍服である HBT、テント地やカッパ等を利用した衣服、コーラ瓶を半分から切って作ったコップなどがよく知られているが、これらの詳細については別の文献等でも多々詳述されているかと思われるので、今回この論述に際してはその中でも筆者が特に珍しく興味深いと感じたいいくつかの資料を中心として見ていただきたいと思う。

はじめに先で若干ふれたジュラルミン製品についていくつか特徴ある資料を紹介することにする。普通ジュラルミン製品と聞いて真っ先にイメージするのは、既述のように材料となる飛行機残骸部分を窯で溶かしてから新たに鋳型に流し込んで加工するといった鍛冶的手法による製品であるが、今回の調査において他の手法によるジュラルミン利用製品があることを初めて知ることができた。諸見民芸館に常設展示されているビンダーレ（洗面器）と鍋は、地面に凹型の穴を堀りそこに板状のジュラルミンを置いてビンダーレおよび鍋の形に近づくように上から金槌等で叩いて作られたものである。また、伊江村教育委員会委員長の新城昇氏が個人的に所有しているやかんは、これも同じくジュラルミンを叩いてしかも上下を張り合わせて作られたものであった。さらに、もう1つ印象に残った資料は平良市総合博物館に収蔵されているダーツ鍋（写真1参照）である。この資料で注目すべきなのは、やはり板状のジュラルミンを今度は鍋の形になるように適当にひだ（ダーツ）を寄せて作ったという製作方法の面白さである。学芸員の方の説明ではおそらくこの製作方法が「ダーツ」という名称の由来となったのではないかということであった。

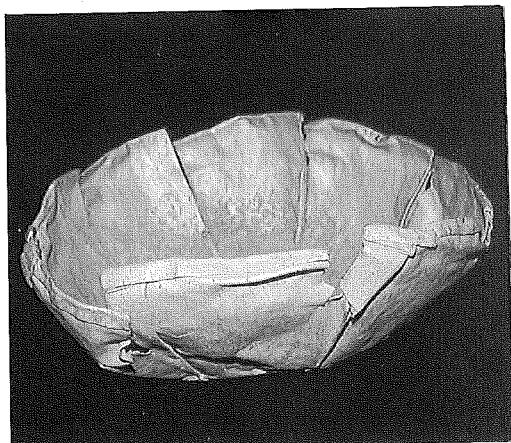


写真1：ダーツ鍋
(平良市総合博物館)

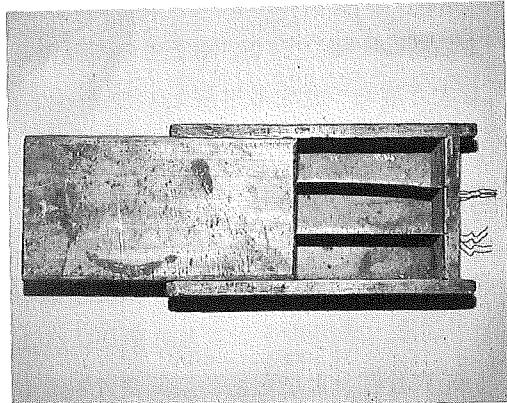


写真2：木製トースター
(宜野座村立博物館蔵)

次に、これも上述の薬莢利用の資料についてであるが、嘉手納町史編纂担当室の方で薬莢を溶かし固めて作られたという洗面器とパーマゴーという変わった資料を見ることができた。また、前述の諸見民芸館には薬莢利用の木炭アイロンというのがあった。これら

資料に共通する特徴としてはかなりの重量があった点であり、これは薬莢がもともと真鍮製であることに起因しているのではないかと思われる。

他に木材を利用したいくつかの面白い資料にも出会った。前述の嘉手納町史編纂担当室には米軍用ベッドの木枠骨組部分を利用した鉋（かんな）があり、宜野座村立博物館においては木製トースター（写真2参照）なる資料があった。これは、ふたの付いた何らかの木箱を利用して作られたものと思われ、パンを焼く部分にトタンを使用して熱の通りを良くしてあるところは見事な創意工夫を凝らした資料であると言えよう。宜野座村立博物館にはまた米軍払い下げの木材を利用したガン（龜）というものまで展示されていた。

このような冠婚葬祭にまつわる資料でいうと、米軍のパラシュートでつくられた神衣装や祝座における太鼓として利用された米軍用水カン（共に石川市立歴史民俗資料館蔵）、さらには宜野座村惣慶部落東組が祭りの際に使用した米軍払い下げ品利用のドラ（宜野座村立博物館蔵）があった。衣食住といった日々の営みに関する資料にとどまらず、こういった特別的事象についての資料までが配給物資を利用して作られていたということは、あらゆる生活の場面においていかに当時の沖縄が物資貧窮にあえいでいたかを、そしてその中にあってかたくなに自分たちの生活文化を守っていこうと懸命だった住民たちのしたたかさを如実に物語っているといっても過言ではない。

その他特に注目したい資料としては、米軍廃品の木綿ロープをほぐしその糸を染めて織り上げた木綿絣やマラリアの薬であるキニーネ染め紅型などの着物（共に石川市立歴史民俗資料館蔵）、米軍用のバケツを利用したアルミ製の手洗い用水タンク（南風原文化センター蔵）等が挙げられる。またこれは配給物資利用の生活資料ではないが、おそらく沖縄戦当時のものと思われる石製地雷を利用した鍋（宜野座村立博物館蔵）というのもあった。

②学校教育関係資料

日常生活の中において忘れてはならないものとして学校の存在がある。終戦直後、沖縄でいち早く教育面の復興がはかられたことについては1章で述べたので、ここでは学校で実際に使用されていた資料について見ていくことにしたい。

終戦直後の配給物資であった米軍のHBTやテント地、カッパ利用の衣類資料があることは先述のとおりだが、これらの布地やビニール地は、衣類だけでなく通学用カバンとして、あるいは子どもたちが教室や校庭で遊んだであろうお手玉や野球用グローブ、ボール（写真3参照）などといった学校関係の資料にまでその形を変えていったのであった（共に平安座小中学校歴史資料館蔵）。

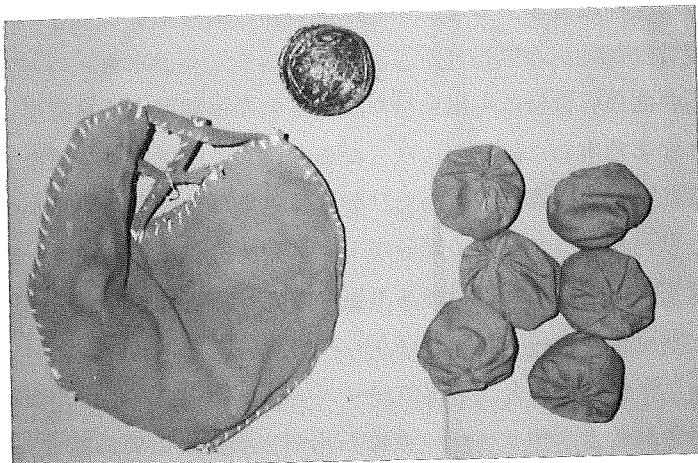


写真3：米軍払い下げカップを利用して作られたお手玉・ボール・グローブ
(平安座小中学校歴史資料館蔵)

③軍作業・戦果・密貿易関係資料

終戦直後の沖縄住民にとって、生活物資のほとんどが米軍からの配給物資に頼らざるをえなかったことは前述したが、やがて住民たちが収容所からそれぞれの旧居住地区へと帰村はじめ、沖縄の通貨制度が復活するようになるとこの配給物資も無償から有償へと代わっていった。人々は物資を手に入れるための給与を求めて仕事に就いていったが、その当時の仕事といえばほとんど米軍基地の労務を行う軍作業しかなかったため、働く者であれば老若男女を問わずこの軍作業に従事し、給与としてB型軍票=B円をもらった。B円は戦後の沖縄の語り草として必ず登場するものであり、軍作業を資料的見地から考えた場合においても立派な一級資料である。

しかし、人々の暮らしは軍作業だけでは到底ままならず、やがて食糧を中心とした米軍の豊富な物資をより多く手に入れる方法として窃盗行為である戦果あげがはびこるようにになった。南風原文化センター蔵のアメリカ製コンパスもそういった戦果品関係資料のひとつである。

さらに当時の人々が生活物資を得るもう一つの手段としては密貿易が挙げられる。宮古・八重山などの離島においては米軍からの援助もほとんどなかつたため、密貿易はさまざまな生活物資を島に運んでくれる重要な役割を果たした。この密貿易の沖縄における中心地となつたのが日本最西端の島与那国で、現在、与那国民俗資料館には表1にあるようにその当時の密貿易を語る資料のいくつかが展示されている。

表1 密貿易関係資料 (与那国民俗資料館蔵)

資料名称	数量	法量	備考
ホイコなべ (ジュラルミン製)	1	H21.8×ふた径22.4	終戦直後に台湾から持ってきたもの。
碗(大)	3	「嵐」銘入りのもの： H7.3×径15.9/ H7.0×径16.0/ H8.2×径19.1	どんぶり型のもの。台湾の人たちがお粥を食べるものとして使用していた。
櫃	1	H14.9×径20.3	台湾で木をくりぬいて作られたもの。
台湾製盆	1	径18.3	
台湾製盆・コースターセット	6	盆(1点)：径22.5/ コースター(5点)： 径6.3	6点一式
ガラス製ボール	1	H8.6×径18.6	資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの
鉄製盆	3	大：径40.4／中：径 35.3／小：径30.3	資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの
コーヒーポット	1	H18.3×W24.0	資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの／「CHERRY CHINA SANGO JAPAN」銘入り
コーヒーカップ	2	径9.5	資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの／「CHERRY CHINA SANGO JAPAN」銘入り
コーヒーカップ受け皿	2	径14.5	資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの／「CHERRY CHINA SANGO JAPAN」銘入り
吸物碗	1	H8.0×径11.1	緑色／資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの
吸物碗	1	H7.4×径10.4	茶色／資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの
米酒ガーミ	1	H46.5×径34.0	ふた付／緑釉掛／台湾製
米酒ガーミ	1	H47.5×径34.0	ふた付／褐釉掛／台湾製
桶	1	H36.6×径39.6	台湾から入ってきたもの。米櫃として使用していた。
石臼(タイワンウス)	1	H18.5×径37.0	台湾から入ってきたもの。前述資料の桶・土台となる木枠(アジマー)・挽き木と併せてセットで使用されていた。セット時の法量：H59.5(全体の高さ)

2) アメリカ文化移入期の生活資料

①生活改善運動関係資料

前述したように、住民たちが旧居住地への帰村を終え、生活状況も落ちつきを取り戻すようになってくると、今度は農村および漁村を中心として、生活環境の改善と健康づくりを基本的テーマとし、^(註12)身近な生活の問題をとりあげ、解決していくことを目的とする生活改善運動が行われるようになっていった。主に生活技術の普及をはかるため、各地域ごとに置かれた生活改善普及員が普及指導にあたり、その指導内容はさまざまでまた時代ごとに変化が見られた。

この生活改善運動関係資料としては、芭蕉布や縫着物をワンピースやツーピース、上着等の洋服に作り替えた衣類のいろいろや手作りの鯉のぼり（共に宜野座村立博物館蔵）、また面白いものとしては米軍払い下げ品を利用した改良カマドの作り方や物を頭に乗せること等の生活習慣の見直しおよび改善を促した図入りの文書資料（県立図書館史料編集室蔵）が見られた。

②「基地の街コザ」関係資料

琉球政府成立以降のアメリカナイズ的生活資料について見ていくとき、その代名詞ともいえるのが「基地の街コザ」の存在である。本島中部に位置するコザは、今でこそその市政名を沖縄市と改めてはいるが、沖縄ではどちらかといえば未だにコザという呼び名が一般的に用いられており、なじみ深い。

東洋最大の規模を持つ嘉手納基地に隣接したこのコザの人々は、米軍基地によってその運命を幾度となく翻弄されたが、Aサインバーや質屋、お土産品店などの米兵相手の商売を生み出して基地と密接した生活を送るなか、一方では民謡や芸能といった沖縄の伝統文化を発展させていった。そういう意味ではコザは戦後沖縄の姿を象徴し今に伝える興味深い街であるといっても過言ではなかろう。

さてこのコザについて資料的に見ていくと、やはりアメリカ的影響を多く受けた資料が目立っており、諸見民芸館に至っては館収蔵資料のほとんどにその影響が象徴されているようと思われる。また、Aサインバーのネオン看板やジューケーボックス（沖縄市立郷土博物館および諸見民芸館蔵）、軍雇用員関係資料（表2参照・沖縄市史編集室蔵）などもコザならではの資料の数々であると言えよう。

表2 軍雇用員関係資料の一部（沖縄市史編集室蔵）

資料名称	数量	備考
終了証書	1	‘Department of the Army Certificate of Training’／KIYOKO URASAKI MILITARY CORRESPONDENCE COURSE (16 HOURS)／16. October 1970。軍雇用員のためのトレーニングを終了した証明書。
在琉米従業員公報	6	第5号「特殊作業手当」1972.4／第6号「扶養手当と通勤手当」／第7号「祝日」／第8号「語学手当」1972.5／第9号「期末手当・従業員の行為」1972.5／第10号「従業員の行為」1972.5。3枚一綴りの2点。表は日本文・裏は英文で記述されている。
雇用記録文書 (URASAKI KIYOKO Clerk Typist)	9	9枚一綴り。1960～70年代のもの
NHK ラジオテキスト英語会話	1	軍雇用員の人が使用していた書籍。1961年2月発行。
WINDOW ON THE WORLD 1	1	軍雇用員の人が使用していた書籍。1958年4月発行。好学社
今日に生きる日米会話 1	1	軍雇用員の人が使用していた書籍。1954年発行
文書：「軍関係離職者の皆さんへ 高等弁務官付再雇用員調整官より 退職金などについて」	1	1971.1.1 高等弁務官付再雇用調整官 ウィリアム・T・バード。4枚一綴り
軍雇用員への表彰状	2	SEIEI KIYAN 宛「DEPARTMENT OF THE ARMY」1969.6.10／1967年頃
軍雇用員への表彰状	1	SEIEI KIYAN 宛「USARYIS CIVILIAN WELFARE FUND COUNCIL CERTIFICATE OF RECOGNITION」1962.2.9

3 琉米文化会館の果たした役割とその資料

琉米文化会館は、米国民政府の直轄施設として米国の政策および情報を沖縄の住民たちに知らせることを目的に1947年から52年頃にかけて那覇、石川、名護、宮古、八重山の5ヵ所に設立されたアメリカ式の情報文化センターで、会館設立時から1971年の閉館に至るまでの約25年間にわたる戦後沖縄の文化および社会教育の発展を語る際、決して忘れてはならない重要な位置づけを持った文化施設である。^(註13)今回の資料調査ではその中でも特に宮古・八重山両琉米文化会館関係資料をあたるとともに、当時の関係者の方々からの話をうかがう機会にも恵まれたので、そのことについて記していくたいと思う。

まず、宮古琉米文化会館について見ていくことにする。1952年4月の琉球政府創立とほぼ同時期に開館された宮古琉米文化会館は、館長と始めとして行事担当や司書など14、5人の職員を要し行事部と図書室部とに職務を分担、活動を行った。行事部では積木遊びなどの幼児教室、小・中・高校生対象の少年少女合唱団や英会話教室、ガールスカウト、一般向けの絵画、書道、生け花、英会話等の各教室やダンス、演劇、琉舞クラブなど、小

では宮古琉米文化会館におけるこれらの活動を資料を通して見ていくことにしたい。ま
ず、平良市総合博物館には大理石（トラバーチン）で造られた英字入りの宮古琉米文化会
館看板と巡回映写会の際に使用したと思われる映写機、携帯用スピーカー、16ミリフィ
ルム等の資料が収蔵されていた。次に、先ほども若干ふれたが、宮古琉米文化会館閉館
後、引き継いだ建物および業務のほとんどを現在も担当する形となっている平良市立図書
館の収蔵資料を紹介すると、ここには宮古琉米文化会館当時の洋書に代表される図書資料
をはじめとして、琉米文化会館の職員が毎日記録していた会館日誌および当時の活動を示
したファイルの一部が残っている。

ところで、この平良市立図書館における収蔵資料について特徴的に感じた点があるのであえて記しておきたいが、ここを調査した際、当初予想していたよりもはるかに残存資料が少ないという感想を持った。というのは、前述のように当時の機関を建物ごとそっくりそのまま移管したはずの場所においてはよほどのことが無いかぎり資料が分散することはないだろうと思っていたからである。実際、関係者の方からも次のような話が聞かれた。当時、宮古琉米文化会館では大宜味館長をはじめ職員たちによって関係資料はすべてリストアップし形としてきちんと残したはずだったが、あれだけの貴重な資料は現在一体どこに消えてしまったのか自分たちにもよく分からぬということである。宮古関係の資料が少ないということは先の1章でも述べたが、なぜ宮古関係の資料は残存しにくいのか、今回の資料調査で疑問に感じたことの一つであり、また学芸員業務の柱でもあるこの「資料保存」面については今後これからもしっかりと取り組んでいかねばならない重要課題であるということを自己反省の意味も含め痛切に認識させられた。

この宮古の事例とは対照的に、今度は、八重山琉米文化会館の資料について見ていくことにするというと、こちらは当時の資料がかなり残されているという印象を持った。八重山でも当時の職員だった方からの話をうかがうことができたが、^(註1)文化会館の活動状況についてはほぼ宮古の事例と同じなので、紙面の都合上ここでは特徴的な事象を紹介するにとどめたい。八重山諸島はその地形の複雑さゆえに離島や陸の孤島的地域が多く、館外活動としての巡回移動文庫や巡回映写会については、職員が月1回ぐらいのローテーションで2人1組になって担当し、本貸出および映写会の他にも専門家をよんでの講演を開いたりしていたそうである。移動の際には船を利用してあちこち回ったり、また、当時は電気が通っていなかったこともあって発電機を持参、操作もすべて自分たちの手で行ったということであった。そのこともあって住民たちは巡回映写会などを非常に楽しみに待っており、歓迎されたそうである。また、職員たちも文化活動をしているという自負を持って仕事に取り組んでおり社会教育普及のための自主学習もしっかりと行っていたということであった。

この八重山琉米文化会館関係資料では、当時の活動を示したアルバムおよび新聞記事スクラップ、文書や年間スケジュール等を綴ったファイル、洋書をはじめとした図書資料、映写機および携帯用スピーカー、さらには「他文館カレンダー綴り」と題して上述の那覇、石川、名護、宮古の各琉米文化会館から送られてきたカレンダーおよび行事予定表がきれいにファイルされた資料など、多くの関連資料が石垣市立図書館に移管されて残っていた。その他、八重山博物館には巡回用図書箱や図書室の看板、ガールスカウト活動の際に使用されたと思われる米軍用携帯食器セット等の資料が収蔵されている。

以上、この章では宮古・八重山を中心とした琉米文化会館について述べてきたが、この

ように琉米文化会館の活動の様子および関係資料を見る限り、戦後沖縄の文化ならびに社会教育発展において琉米文化会館の果たした役割というのは重要であり、その根底には各会館の活動に際する助言指導面やもちろん資金面において米国民政府側の援助があったこと、また実際に各会館で働く職員たちにとっては当時の憧れの的であったアメリカ文化に直接的に触れる機会を他の住民たちよりも多く持つことができ、さらに給与面などから見ても他の職種より優遇されていたことなど、これら諸々のことをふまえて考えると住民たちがいくら支配者とはいえ米国側に対して少しあは好意的見方もあったという点は確かに否めない。

しかし、琉米文化会館はあくまでも先述のように米国民政府直轄施設であり、基本的にはアメリカの対沖縄占領政策および文化政策に強く規定され、「宣撫的文化政策」の拠点としての役割をも果たしたという点は決して見逃してはならない重要なところである。小林文人氏らが強調しているように^(注18)「基本的には、沖縄民衆の生活と意義の深部には、琉米文化会館は滲透・定着することはなかったというべきであろう。部分的に近代的かつ文化的であっても、沖縄民衆にとっては所詮それは占領者側が与えるものであり、その意味で異質であり、ときには甚だしく嫌悪すべきものであった」であろうし、実際、映写会に使われたフィルムのほとんどが米国のものであるということや、住民たちの多くにとって十分に読みこなすことは困難であろう洋書の図書がなかなか多いという点、さらには米国側の宣伝誌配付センター的役目を琉米文化会館に託したといったこれら関係資料の面からもうかがえるように、琉米文化会館における活動はおそらく米国民政府の支配的手中から離れることはなかったからである。よって、琉米文化会館の果たした役割を見ていくとき、それは戦後沖縄の文化向上および社会教育発展の上で必ずしも歓迎されるだけではなかったという側面の視点をも持つことが大切なのではないかと筆者は考える。

4. 沖縄系移民の諸資料

1) 県内の移民関係資料

移民に関わる資料は個々人あるいは公共的な機関で保管されており、今回の調査ではそれらのほんの一部をかいま見たに過ぎないが、幾乎かでも記録をとどめておく必要があると思われたので、ここにかいつまんで記述しておきたい。各所蔵機関の資料一覧をあわせて掲載する予定であったが、紙幅の関係上やむをえず割愛した。

金武町は、当山久三の出身地であり、海外へ多くの移民を送りだした地域であることもあって、移民関係資料が豊富に収集されている。

金武町教育委員会では、博物館建設の予定があり、多くの資料が収集されている。その中にはひときわ大きく、頑丈な金属製のトランクがある。教育委員会社会教育課の仲間政治氏によれば、南米への移民の人たちが所有していたこのトランクは「ホンコン（香港）バッグ」（写真4参照）と通称されていた。というのも、南米への移民が香港経由で渡航しており、その際に香港でこれらの大きなトランクを買い求めたことからそう呼ばれた。自分たちが最初に持っていたやなぎごうりからそのバッグに荷物を移し替えたという。

その他に、ロサンゼルスで録音され、ニューヨークで製作されたレコード「屋嘉節／懐かしき故郷 普久原朝喜」と「筑前 吾等の家は五大州（上・下） 鹿倉旭富」がある。後者は当山久三を題材として作られた浪曲であり、貴重な資料である。

金武町史編纂室には、布哇浄土宗教団総長から仲間勇三氏宛の感謝状、琉球政府米国民政府発行のパスポート、仲間ナベさんからハワイへ送られた布製の封筒、渡航費貸付契約書、南米やフィリピン他の写真などが多数収集されている。

宜野座村立博物館には、展示室にアルゼンチンから帰沖する際に用いた鉄製のトランクが展示され、「沖縄行・幸喜」との銘がある。他に革製のトランク、やなぎごうり、フィリピンから持ち帰ったナベや水牛の角などがある。



写真4：香港バッグ（金武町教育委員会蔵）

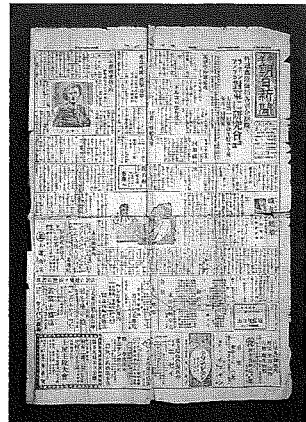


写真5：『南洋朝日新聞』
(石川市立歴史民俗資料館蔵)

移民で海外へ渡航するときの様子を示す日記などは非常に貴重である。具志川市史編さん室には南米関係の移民資料が収集されていて、その中の一つに、「海外渡航記念帳」という日記を記した手帳がある。具志川出身の山口栄清氏の手記で、神戸から香港、シンガポール、コロンボ（セイロン）、ダーバン、ケープタウン、そしてブラジルへと航海して移民先へ渡航したことがわかる。日記帳は昭和13年旧暦5月9日から書き始められてい

る。日をとて、船の航行、天気、1日の行動が簡潔に綴られており、移民資料として重要なである。

また、移民関係資料としていま一つ注目されるのが、石川市立歴史民俗資料館の所蔵で、石川善吉氏から寄贈された『南洋朝日新聞』（写真5参照）であろう。県内では他に所蔵していないという移民先で発行された新聞資料である。昭和16年4月9日付で、発行は南洋サイパン・北ガラパンの二島となっている。

ところで、戦後、沖縄が復興する過程で、本土や海外在住の県出身者から救援運動がなされたことはよく知られている。それとはやや経緯を異にするが、海外からの引揚者が帰沖して復興の一躍を担った例をここで一つ紹介しておきたい。

石垣市立八重山博物館の大浜憲二氏より紹介をうけた石垣市在住の大底悦さん（石垣市新川出身・大正2年生）は、南洋サイパンへの移民の経験がある。^(注19) 大底さんの自宅には、昭和21年にテニアンから最後に沖縄へ引き揚げる際にアメリカ人から提供されたジュラルミン製品などが残されている。これらは現地で当時よく使用されていた製品で、夫の大底満名さん（明治41年生、新川出身）が英語に堪能であったことから、譲り受けたものである。夫は昭和8年頃にはテニアンに入植していたようである。

大底悦さんは、昭和10年に写真の見合結婚でサイパンに赴くことになった。当時24歳であった。14日間船に乗ってサイパンに着いた。サイパンに1泊してからテニアンに向かった。夫は南洋興発（株）の機関長として働いていた。沖縄の出身の人々は何人かいたが、八重山からは大底さんだけであった。悦さんはその後10年間テニアンに在住し、テニアン国民学校の教員を終戦まで務めた。大阪女学校をでていたので、その経験が生かされた。それでも、移住当初の頃、夫を送りだした後は寂しさからよく泣いていたという。

サイパン・テニアンは戦争では玉碎組であった。追いつめられた人々は、泣くわが子を崖から捨てたりしたが、本人たちの子どもは泣かなかったので、そのようなこともなく、沖縄に3人の子どもを連れて帰ることができた。

引き揚げは昭和21年で、現地では主人が一時抑留されていた。石垣に戻ってから始めた水道配管の工事技術はこの抑留中に、アメリカ人から教えられたものだという。また、その時には米人が使用していたジュラルミン製品を持ち帰った。解放された後、千歳丸でテニアンから出発して馬天港に入った。現在の沖縄市高原のインヌミヤードウイにキャンプ生活をした。そこで、2~3ヶ月生活してから、夫が船を手配することができた。20数名が乗船し、宮古経由で、八重山に戻ることができた。八重山に着いたのは、旧暦の8月15日であった。

石垣に戻ると水道を引く事業を始めた。石垣で水道が引かれたのはこれが最初だった。水道工事で用いる工具類はテニアンのアメリカ人から譲り受けたもので、一部は現在も保

管してあり、他は水道会社に渡してあるという。戦後の石垣市の復興期において、水道事業に関しては、南洋からの引き揚げ者である大底氏の尽力が大きかったことがうかがえる。

2) アメリカの沖縄系移民資料

①ハワイ

マウイ島のマウイ沖縄文化センターには、ロイ・R. ヨナハラ氏が収集した資料をはじめ、マウイ在住の沖縄出身の人たちが寄贈した資料が展示・保管されている。

ヨナハラ氏の所蔵する資料は特別展で公開されるのでここでは割愛させていただくが、それらとは別に、『首里市立女子工芸学校卒業アルバム』(1931年) やヨナハラ氏所蔵のアルバム写真がある。それらには首里城関係、とくに御内原や建物内部の写真が多く含まれている。ヨナハラ氏のお母さんは名前をフミ・ヨナハラ（旧姓：仲座文）といい、首里市立工芸学校を卒業し、その後学校で教鞭をとっていた。だいたい1917～18年頃という。アルバム写真にている首里城関係の写真はおそらくは当時のものと考えられる。その後ヨナハラ氏のお母さんは父と結婚し、呼び寄せられる形でハワイへ来ている。父が先にホノルルに移民で来ていて、母と結婚後にマウイに渡っている。

ヨナハラ氏が一部尚家の家紋が入った染織資料を有している。というのも、戦後の1945年頃日本に来ていたことがあり、そのころ漢那憲和・政子夫妻にお世話になり、懇意になった。^(注20) 政子夫人は尚泰の四女であることから、嫁入りで所持していた尚家関係の染織資料を譲り受けたものという。

また、マウイの沖縄救援関係の写真が2点ある。一つは、「沖縄戦災民救難品荷造りを終えて」と題されているもので、1945年12月15日の写真である。ワイルク昭和青年会館

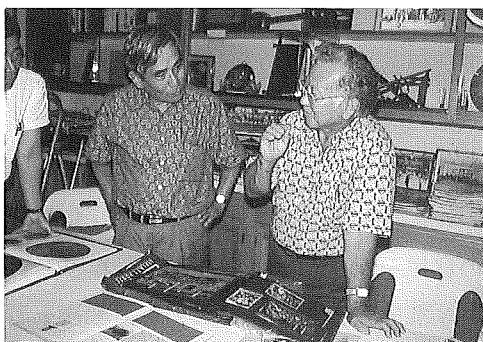


写真6：ヨナハラ氏（右）と聞き取り中の
大城学芸課長
(マウイ沖縄文化センター)



写真7：沖縄への医薬品荷造り・中央で子
どもを抱いているのがエドワード・
クシ氏
(マウイ沖縄文化センター蔵)

で撮影されたものである。ワイルク昭和青年会館は1935年に設立されたもので、戦後マウイ沖縄人系連合会館へ改称された。いま一つは、同じ時期の写真で、「沖縄への医薬品を梱包して発送するところ」のもので、ワイルクのドクター、エドワード・クシ氏（久志：首里出身）の家の前で撮影された写真である（写真7参照）。ドクター・クシは、沖縄の人で最初にハワイ大学を卒業した人であったという。

センターに展示中の南蛮壺は、安里カナさん（沖縄市美里出身）から寄贈されている。これは沖縄からスクガラスを入れて送ったもので、昭和10年頃という。当時ハワイで輸入して販売していた。移民先に在住していても沖縄の味は忘れられなかつたのであろう。セイイチ・カミムラ氏（沖縄市越來出身）が寄贈したスーツケースは、1930年頃本人が沖縄に一時戻ったりしたときや各地を旅行したときに使用したものである。ウシ・ヒガさん（北中城村島袋出身）が寄贈したやなぎごうりもある。

また、クニヨン氏（那覇市首里出身）が寄贈した工工四是、第2次世界大戦中に、マウイで工工四が手に入らない折、有り合わせのスクラップブックに工工四を書き写したものである。

ホノルルのハワイ沖縄センターには、三線・ソロパン・工工四ほか沖縄関連の資料があるが、その中で注目されるのが仲眞良永・良金父子の愛用した三線である。

ハワイの琉球音楽は、1906年（明治39）仲眞良永氏が開拓し、その子仲眞良金氏と、宮城栄吉氏師範の時代に確立されたという。野村流音楽であった。仲眞良永氏は1875年（明治8）に美里村字泡瀬で生まれた。12歳の頃美里親方に見いだされ、歌道に励み、野村流の競演会で優勝してからは、尚家に奉公し桑江良慎氏の指導を受けながら音楽を学んだ。その子の仲眞良金は1921年（大正10）に父の呼び寄せでハワイに来て、以後は父とともに演芸会での地謡を務めた。また、宮城栄吉氏は与那城村出身で、1922年に18歳でハワイに移住した。祖父が琉球音楽に造詣が深かったことから子どもの頃から興味をもち、来布後は仲眞良永氏に師事し学んだ。

②ロサンゼルス

ロサンゼルスにある北米県人会は、今回の特別展に関連して、全面的なご協力の下に多くの資料が新たに発掘された。

北米県人会には、戦後沖縄に来てアメリカへの移民を呼びかける懇談会の記録写真資料が一綴ある。年代は不詳であるが、糸満・小禄・与那原・普天間・金武・名護・辺土名などでの懇談会の模様と当時の各地域の状況がわかる貴重な資料である（写真8参照）。

また、同県人会には、在伯国沖縄救援委員会発行の『会報』第1号（1947年7月）から第13号（1948年7月）までが所蔵されている。『会報』は1948年の6月を除き毎月発

行されており、正式名称は伯国赤十字社公認日本救援会サンパウロ支部沖縄救援委員会である。この『会報』は、私見では沖縄県内に所蔵されている機関があるのかつまびらかでないが、おそらくきわめて希少な救援関係資料と推定される。



屋宜盛浦氏は三線の「健堅与那」と呼ばれるものを所有している。その来歴を記したメモ書きによれば以下のようである。三線・健堅与那は、伊江王子が尚育王より拝領後、伊江家より高安朝常に譲渡された。この三線はもと志多伯開鐘と対であったが、双方ともに盜難に遭い、その後発見されて本家に戻った。「健堅与那」と称せられた名器である。本来の持ち主は首里の高安殿内・高安朝常氏からハワイの仲眞良金氏に渡り、1990年に現所有者の屋宜盛浦氏の手に譲渡された。由来についてさらには補充調査が必要である。

同じく三線の中でブラジルで製作されたものがある。名護市田井等出身の糸数文男氏が所有するもので、カンポグランデの伊礼ジョー氏が製作した。1950年頃の製作である。材料はすべて現地で調達して作られており、胴の皮はブラジルの蛇ボアの皮を用いている。糸数氏は1954年にボリビアのコロニア・オキナワへ2次移民として渡った。その後、1962年アルゼンチンに移住し、さらに1972年にここロサンゼルスへ移住した。この他、1930年頃の芭蕉絹縞、木綿絹白地絹縞などの染織資料も所有している。

軍事機密『戦闘要報綴第2中隊』はヒロシ・オカノ（岡野博）氏が所有するもので、本人は帰米2世で、1941年10月にミネソタ州の軍インテリジェンス語学学校に入学した。その後、第2次世界大戦中の1945年の4月から12月まで通訳として沖縄に配属された。第10軍であった。

『戦闘要報綴第2中隊』には、第88野戦病院での写真、台風直後の与那原・中城湾の写真、キャンプでの芸能写真など終戦当時の沖縄の写真が数多く掲載され、貴重な写真記録である。また、中には米軍が沖縄で配布したプロパガンダ・リーフレット（写真9参照）も添付されている。表は「老人や女だけで沖縄の再建は望みない」という文言で、裏面は

「沖縄男子へ」で始まる説得の文章である。この種のリーフレットは数多くあるが、本資料はこれまでには紹介されていないものようである。

小橋川次郎氏は在米沖縄救援連盟報道部発行の『救援ニュース』を所有している。第2号（1946年10月）、第5・6号（1947年10月）、第7・8号（1948年4月）、ならびに在米沖縄復興連盟発行の『救援ニュース』第3号（1950年7月）である。この『救援ニュース』については、沖縄県立図書館史料編集室に、『戦災沖縄救援復興活動記録』として、創刊号から終刊号までが一括して収蔵されている。とはいっても、『救援ニュース』自体は、資料の現存が少なくとりわけ貴重である。小橋川氏は父が本部町伊豆味の出身で、最初はメキシコ移民（1904年移住）であった。その後父はアメリカアリゾナ州へ移住し、本人は1914年11月4日に生まれた。その後6歳の時に沖縄へ来た。1929年に名護の第三中学校を卒業し、1931年に16歳でアメリカに帰国した帰米2世である。帰国するときには神戸から竜田丸でサンフランシスコへ渡航した。その際の乗船証なども保管されている。

真境名愛子氏は祖父（母の父）である大城元長氏の終戦直後の日記がある。日記は4冊あり、1948年10月26日以降、1950年8月15日以降、1951年1月24日以降、年月日記載なしのそれぞれである。終戦後に初めて配給された紙に綴った日記で、場所は知念村久手堅となっている。なお、同氏は絹白地型付、桐板経縞など染織関係も所蔵しておられる。

以上、アメリカ在住の沖縄系移民の人々が継受している諸資料について略述したが、移民社会においては、思いのほか伝統的な生活資料を有していることが摘記できる。ハワイでは2世・3世の世代に移行しており、ロサンゼルスでは1世から2世の世代へこれから移行しようとする時代である。それぞれ移民社会の世代深度は異なるが、伝統文化の強力な継承という点では共通している。それゆえ、現地の沖縄では戦災などの関係でもはや収集できない貴重な資料が受け継がれているものもある。したがって、単に移民資料という視点からだけではなくことのできないものであり、今後はもう一つの沖縄文化として資料の掘り起こしをおこなうべきであろう。

おわりに

沖縄県立博物館は戦後の灰燼に帰した状況の中から、当時の職員たちが文化財の収集に尽力してきた。その努力のかいがあって、美術工芸資料を中心に多くの資料が当館に収蔵されるようになった。博物館の企画展・特別展では、機会ある度に、それらの美術工芸資料が公開されてきた。

しかし、当博物館では、これまでに戦後資料を意識的に収集しようとする配慮に欠けて

いたように思われる。民俗資料の中でジュラルミン製品やタンク舟、歴史資料の中で、海邦国体の役員の帽子・腕章、7・30関係の標識や標示類、琉球政府時代の三角点などが収蔵されてはいる。ただ、これらは機会よく当館に寄贈あるいは移管されたもので、一定の視点に立脚して体系的に収集されたものではない。

そのようなことから、今回の調査による反省をふまえ、戦後資料ならびに移民とともに諸資料は、体系的に、しかも各市町村とも相互に連携・協力して全県的な規模で調査・収集される必要があると思われる。

〈脚注〉

- (1) 上江洲敏夫「解題」『沖縄県史料』戦後2 沖縄民政府記録1 p 5 沖縄県立図書館史料編集室編 1988年
- (2) 沖縄民政府は1946年4月24日発足当時から同年11月30日までは「沖縄中央政府」と称していた。
- (3) 大城将保「解題」『沖縄県史料』戦後1 沖縄諮詢会記録 p 9 沖縄県立図書館史料編集室編 1986年
- (4) 「沖縄民政府直営劇団」『沖縄大百科事典 上巻』 p 587 沖縄タイムス社 1983年
- (5) 沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール『報告書 あし 第15号 戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』 p 63 1994年
- (6) 「八重山支庁」『沖縄大百科事典 下巻』 p 695 参照のこと。
- (7) 米国政府は沖縄統治のための政府出先機関として、それまでの米軍政府を廃止、1950年12月15日新たに琉球列島民政府を設立し以後1972年5月15日の沖縄日本復帰まで沖縄統治における最大の権限を持つ機関となった。
- (8) 「群島政府」『沖縄大百科事典 上巻』 p 1010
- (9) 「第二節 戦後の民具」『浦添市史 第七巻資料編6 浦添の戦後』 1987年 を参照されたい。
- (10) 「通貨制度」『沖縄大百科事典 中巻』 p 807~809 参照のこと。
- (11) 「B円」『沖縄大百科事典 下巻』 p 276~277 参照のこと。
- (12) 「生活改善運動」『沖縄大百科事典 中巻』 p 543
- (13) 「琉米文化会館」『沖縄大百科事典 下巻』 p 956 参照のこと。
- (14) 当時の会館職員である砂川幸夫氏（現在沖縄図書館宮古分館長）からの聞き取りおよび同氏「『宮古琉米会館』の文化活動を振り返って」『地域と文化』20号 ひる

ぎ社 1983年による。

- (15) 当時の会館職員である友利敏子氏からの聞き取りによる。
- (16) 砂川幸夫、上掲書による。
- (17) 当時の会館職員である与儀玄一氏（現在石垣市立図書館長）からの聞き取りによる。
- (18) 小林文人・小林平造「琉米文化会館の展開過程」『民衆と社会教育－戦後沖縄社会教育史研究－』 p186 エイデル研究所 1988年
- (19) 大底悦さんからの聞き取りによる。
- (20) 漢那憲和氏（1877～1950）は軍人でもあり、政治家。1923年に少将まで昇任、退役後の1928年には、衆議院議員に当選。以後5期の14年間議員を務め、内務次官にもなった。

【謝辞】

この原稿を記すにあたり、以下の県内各機関および関係者の方々には、多忙な中、大変お世話になった。

- ・伊江村教育委員会委員長 新城昇氏
- ・宜野座村立博物館
- ・金武町教育委員会
- ・金武町史編纂室
- ・石川市立歴史民俗資料館
- ・石川市立城前小学校校長 富田烈氏
- ・嘉手納町史編纂担当室
- ・平安座小中学校教頭 佐久川清氏
- ・沖縄市立郷土博物館
- ・沖縄市史編集室
- ・諸見民芸館
- ・南風原文化センター
- ・沖縄県立図書館史料編集室
- ・平良市総合博物館
- ・平良市立図書館
- ・沖縄県立図書館宮古分館
- ・友利敏子氏（宮古地区婦人連合会会长）
- ・石垣市立八重山博物館
- ・石垣市立図書館
- ・南嶋民俗資料館
- ・与那国民俗資料館 池間苗氏
- ・大底悦氏（石垣市新栄町）

また、ハワイではハワイ沖縄センターのバニー・ミヤシロさんをはじめ、民間大使のジョン・ヒロコ・アラカワさん、タケジロー・ヒガさんにいろいろとご協力をいただいた。マウイ島ではロイ・R. ヨナハラ氏にひとかたならぬお世話になった。

ロサンゼルスにある北米沖縄県人会は、今回の特別展に関連して、会長の沢嶽安和、副会長の當銘洋弘、国吉信義の各氏をはじめ、真境名愛子・糸数文男・宮城次夫・岩田麻利子・小橋川次郎他の諸氏のご協力の下に多くの資料が新たに発掘された。

ここでは紹介できなかったものの、上述の県内資料調査期間中においては、他の機関の方々にもいろいろとご教示をいただいた。

最後に、特に記して感謝申し上げたい。